

※◆日送信

共ト4Q 学芸

◆日送信甲乙A「読書」書評
「()」

◎SFじみた可能性

「ザ・セカンド・マシン
・エイジ」

(エリック・プリニョル
フソン、アンドリュー・マカ
フィー著、村井章子訳)

【編注】電説タテ

30 機械、特にコンピューターの急激な発展とともに、人間の独壇場と思われていた業務が日々機械に取って代われ、しかもその範囲は知的労働にも広がっている。すると世は失業者にあふれ、格差はますます広がるのだろうか。それどころか、人間は機械に駆逐されてしまうのだろうか。そんなSFじみた可能性が現実となりつつあるのだ。

25 本書は、この問題を詳細に分析する。前半は、現在見られるさまざまな機械の発展だ。工場のロボットや自動運転、チェスでのコンピューターの勝利、自動化された倉庫、ビッグデータによる行動予測といったさまざまな成果が紹介される。

20 中盤は、それが労働市場(特に米国)に与えた影響だ。単純な組み立て作業や事務職が大きく賃金を下げ、機械を使って能力を補える柔軟性を持つ知的労働者の需要が高まっているらしい。これ

35 は最近の格差の原因でもある。人間としての優位性(柔軟性、高度な判断や計画、創造性)が今後さらに重要となる。だから、教育と各種の労働市場柔軟化の施策を。これが終盤での提言となる。

40 主張は明解。前半の事例は有名なものが多いが、労働者への影響と政策対応は日本にも当てはまる切実なものだ。むしろ産業革命での余剰労働がやがて吸収されたように、いずれ他の仕事はできる、と本書は述べる。

50 だが、その調整期間をどう乗り越えるべきか。そして読者は、自分の仕事がいずれ(いや明日にでも!)機械に置きかえられないために働き方をどう変えるべきかについて、ぜひとも本書を読んでわが身のこととして考えてほしい。

60 なお本書の原型となった前著「機械との競争」と論点は同じなので、多忙な方はこの短い前著の代用も可。一方で、近年の格差は技術よりも税制や相続などの要因が大ききという主張もある。

70 本書の論点は重要ながら、それだけに捕らわれてないこと。そうした視野の広さこそが、まさに人間の強み、なのだから。

75 (山形浩生・評論家)
(日経BPP社・237
6円)
(了)

【編注】ERIK・BRYNJO
LFSSON マサチューセッツ工
科大(MIT)スローンスクール経

営学教授▽ANDREW・MCAF
EE 同スクールデジタルビジネス
研究センター主任研究員▽むらい・
あきこ▽やまがたひろお

☆ 校正箇所 9/14

カルチャー

※◆日送信

共ト4Q 学芸

◆日送信甲乙A「読書Ⅱ書評」

◎●山形浩生さんママ

「ザ・セカンド・マシン・エイジ」

（エリック・ブリニョルフソン、アンドリュー・マカフィー著、村井章子訳）

【編注】電説タテ

「」

機械と特にコンピューター

の急激な発展とともに、これまでに人間の独壇

トル

場と思われていた業務が日々機械にとつてかわら

「取って代わられ」

れ、しかもその範囲は知的労働にまで広がって

「にも」

いる。すると世は失業者にあふれ、格差はますます

広がるのだろうか？

い

「トル」

やそれどころか、人間は

◎5行分減らすため、語彙削るなどしました。

15 機械に駆逐されてしまう
 のだろうか？
 いま、そ
 んなSFじみた可能性が
 現実となりつつあるのだ
 。

「。」「ト」

本書は、この問題を詳
 細に分析する。前半は、

現在見られる様々な機械

「さまざま」

20 の発展だ。工場のロボッ

トや自動運転、チェスで

のコンピューターの勝利

、自動化された倉庫、ビ

ッグデータによる行動予

25 測といったさまざまな成

果が紹介される。中盤は

「改行」

、それが労働市場（特に

アメリカ）に与えた影響

「米国」

だ。単純な組み立て作業

30 や事務職が大きく賃金を

「下げ」

下げている。機械を使っ

「補入」

て能力を補いつつ働ける

柔軟性ある知的労働者の

「を持つ」

ニーズが高まっているら

「需要」

35 しい。これは最近の格差

の原因でもある。人間と
 しての優位性↓柔軟性、
 高度な判断や計画、創造
 性↓が今後さらに重要と
 なる。だから教育と各種
 の労働市場柔軟化の施策
 を①これが終盤での提言
 となる。

（ ）にカッコにしました。

「」は紙面だと「」が分かりにくい
 ため

「」でニヤれ

「」でニヤれ

主張は明解。前半の事

45

例紹介は有名なものが多

トル

いが、労働者への影響と
 政策対応はこの日本にも
 十分に当てはまる切実な

ものだ。むろん以前の産

50

業革命での余剰労働がい

「ヤガ」
 「」かぶり防止

ずれ吸収されたように、

いずれ他の仕事はできる

、と本書は述べる。だが、
 改行

その調整期間をどう乗り

55

越えるべきか？そして

「」

読者は、自分の仕事がい

ずれ（いや明日にでも！

）機械に置きかえられな

いたために働き方をどう変

60 えるべきかについて、是「ぜひ」

非とも本書を読んで「我が」

身のこととして考えてほ

しい。なお本書の原型と「改行」

なつた二人の前著「機械」

65 との競争』と論点は同じ

なので、多忙な方はこの

短い前著での代用も可。

また一方で、近年の格差

は技術よりも税制や相続

70 などの要因が大きいとい

う主張もある。本書の論

点は重要ながら、それだ

けに捕らわれてないこと

75 。そうした視野の広さこ

そが、まさに人間の強み

、なのだから。（山形浩

生・評論家）

（日経BP社・237

6円）

（了）

【編注】ERIK・BRYNJ

OLFSSON マサチューセツ

ツ工科大（MIT）スローンスク

ール経営学教授▽ANDREW・

ヒル

ヒル

M C A F E E 同スクールデジ
タルビジネス研究センター主任研究
員▽むらい・あきこ▽やまがたひ
ろお